

## 小谷城址の研究(2)

丸山竜平・深貝佳世\*・齋藤めぐみ\*

### A Study of the Ruins of Odani-jo (2)

Ryuhei MARUYAMA, Kayo FUKAGAI and Megumi SAITOU

#### は じ め に

浅井氏の居城する小谷城址から俯瞰しうる湖北は、姉川・高時川流域の広大な平野部を擁するとはいえ、近江全体からいえば、あるいは全国の戦国大名の領域範囲と比較すれば、狭小な穀倉地帯を抱える小規模な平野にすぎない。しかし、この浅井氏が下剋上を果たした敵対勢力である京極氏は、姉川の平野部から離れた坂田郡の中でもその東部域に相当し、生産力からいえば浅井氏とは比較にならない極めて貧弱な地域をその視覚的、直接的基盤とするものであった。『太平記』に直接かわり、当時歴史の表舞台で活躍した京極氏が、そのような未開墾地の広がる生産力の低い、山東町周辺を本拠地にしていたのであるならば、それに少なからず優っていた一方の浅井氏は、たとえ当初は高時川流域の、それもその一角に小さな平野部を生産力の基盤としたにすぎない小豪族であったとしても、大きく戦国大名の地位を築くに際して、かならず遺跡の上においてもそれなりの個性や創造力を発揮したに違いない。

小稿は、浅井氏が、一体どのような規模の城郭を築き、また築かせたのか、それは具体的にどのような特質を持つ縄張りであったのか、といったことを明らかにし、彼の物量的側面から独自の力を推し量っていきたい。この視点は、浅井氏の当初より影のように見え隠れする朝倉氏との関係を、文献史料に関わり無く別個に検討する一手立てでもある。

#### 1. 小谷城の特質

小谷城は全山至る所に郭が配され、その数は大小千数百カ所に及んでいる。ゆえに、その構造的特質を一時にすべて明らかにすることは、我々の力量からいっても不可能に近い。

今後、徐々に縄張構造の解明が進むであろうことを前提に、今回の論旨を助けるものに限って、全体的特質から一瞥しておきたい。

小谷城址の城郭群は、大きく5つの群に分けることが出来る。谷筋にみられる清水谷屋敷群(K区)と谷奥から鞍部にかけての屋敷群(A区)、大嶽山頂・西尾根城郭群(大嶽城、福寿丸、山崎丸など主要郭群を中心に多数の小郭群からなるN区)と大嶽東尾根城郭群(月所丸、G区)そして小谷山尾根筋城郭群(山王丸、京極丸、本丸、桜馬場、御茶屋、番所、金吾丸、出丸などからなるO区)がそれである。

---

\*名古屋女子大学学生

特質の1つは、遺構群が全山にわたるものの、各郭群の間においてその内容が均質でなく、ゆえに以下に述べる群の設定が可能なことである。つまり城郭群が支群に群別可能で、かつ各支群が多様なことである。この多様さの中にこの城郭の歴史が読み取れるのではないかと予測される。

各支群に目をやると、大嶽・西尾根(N区)では、相互に独立的なそれでいて堀切で遮蔽するわけではない3つの独立した城郭遺構からなる。東尾根(G区)で1城郭が築かれ、鞍部への通路を遮蔽する遺構はない。これにたいして、小谷山尾根筋中心部(O区)では、相互に連結する郭群が、いわゆる梯郭式となって尾根筋に並び、左右の谷斜面にも多数の屋敷郭や帯郭(腰郭)が認められる。また、この小谷山尾根筋先端の城郭遺構(出丸)は、中心部からは完全に別群として区別される。しかし、その間の尾根筋上、わけても出丸頂部の北側、あるいは金吾丸頂部の前後にも堀切など通路を大きく遮る遺構が認められない。

つまり、小谷城の山城遺構は、清水谷屋敷群(S区)を除いた、大嶽西尾根筋遺構群(N区)と同東尾根筋の1城郭(G区)、さらに小谷山尾根筋城郭群(O区)と谷奥・鞍部城郭群(A区)の4区に大別される。また、多くの山腹遺構群は小谷山尾根筋遺構群と一体となるが、清水谷屋敷群との関わりもあり、今後全体の中でその評価を果たしたい。

これを整理すると、

O区 小谷山尾根筋城郭群・小谷城中心城郭群

- a. 中心部・主要一大城郭群—大広間、京極丸、中丸、御茶屋など
- b. 金吾丸
- c. 尾根筋先端部郭—出丸
- d. その他尾根筋左右の膨大な郭群

A区 谷奥谷筋・鞍部城郭群

- a. 鞍部遺構群—六坊
- b. 谷奥谷筋城郭群—屋敷など

G区 大嶽東尾根筋城郭群(月所丸)

N区 大嶽山頂・西尾根筋城郭群

- a. 大嶽城
- b. 福寿丸
- c. 山崎丸
- d. 大嶽山頂から鞍部尾根筋間にかけての郭群など
- e. 大嶽北山麓部などの郭群(ただし、今回の考察からはd, eとも除外し清水谷屋敷群とともに今後の課題とする)

となる。

つぎにこれらの城郭を、Ⅰ—方形単郭式(非囲郭式)とⅡ—方形単郭式の土塁囲郭形式さらにⅢ—方形単郭式の横堀、土塁囲郭形式の3種に類別して、その性格を探ってみたい。

この分類でみると、横堀・土塁を備えた方形単郭を基本とする完結した城郭(Ⅲ型式)は、大嶽山頂・西尾根筋城郭群のすべて(N区—a, b, c)、つまり大嶽城・福寿丸・山崎丸に認められる。しかし、逆に言えば、他のいかなる地域にもこの型式は及んでいない。及んでいるのは、至近の支城である中島城、丁野山城がそれである。しかしこの点に関しても、同じく至近距離にあって対信長との前線となった浅井氏の兵が布陣するひばり山や大依山には明確な城郭遺構は全く認められない。

Ⅲ型式はもとより山城遺構としての城郭は、戦場となるとどこどこにでも築かれたというようなものではなく、別個のところに築城の論理が存在したことを大いに示唆するものである。

他方、横堀はないが土塁が巡る型式(Ⅱ型式)は、小谷山尾根筋の先端に築かれた遺構(出丸)(O区-c)と月所丸(G区)がそれである。

さらに横堀もなく、また不十分にしか、四周を囲郭する遺構を持たない形式であるⅠ型式は、小谷山尾根筋のO区-a, b, A区-a, b, N区-dに集中する。このⅠ型式に先行するものとして予想する0型式は後述するが、O区-aの中丸などその可能性が強い。

つまり、遺構(縄張調査上)のうえからみて、小谷山尾根筋上に築かれた、この小谷城でもっとも主要な郭の集中する箇所では、いずれもがさきに指摘した遺構(横堀、土塁)が完備しない型式(Ⅰ型式)のものばかりであった。ただ付言しておきたいことは、この地区では横堀、土塁の遺構はないものの、かといって防御性が薄いのかといえそうではなく、四周の切岸遺構、つまり法面の傾斜が、大嶽の西尾根(N区)、東尾根(G区)、さらには小谷山尾根筋先端遺構(O区-c・出丸)の持つ山腹斜面よりも幾倍もの険しい崖面を形成していることである。この険しい傾斜は、下段につづく腰郭(帯郭)あるいは屋敷郭の形成と不可分の関係にあって、人工的に切岸とされているものであり、全体の要塞化がここで果たされていることにその特質が関連してある。横堀・土塁がないのは型式の相違であって、防御面での軟弱さを示す指標とはならない。

さて、つぎにこれらO区、A区、G区、H区各遺構群の築城の順次を想定すると、横堀の出現は近江の山城では(相対的に)最も新しい要素であり、大嶽山頂・西尾根筋の3城郭に集中し、かつ小谷城の至近支城に集中することも歴史的な築城契機を反映している。さらにその土塁がかなり整然と整いつつあることもこの城郭部分が小谷城のなかでもっとも新しい箇所であることを裏付けている。

横堀のない、小谷山尾根筋先端遺構(出丸、後に述べるように一部を除いて)と大嶽東尾根遺構(月所丸・G区)とは相対的にこれらに先行するものである。さらに土盛りによる部分的土塁遺構の見られるもの、地山を削り残しての土塁遺構と想定されるもの、との相対的年代が予測される。

この関係を整理すると、

0期—大嶽城(大嶽山頂)や山王丸から中丸にかけての下層部分か。

1期—金吾丸、六坊、

2期—小谷山中心部郭群・京極丸、大広間・黒金門など

3期—小谷山尾根筋先端城郭・出丸、大嶽東尾根筋城郭・月所丸

4期—大嶽山頂・西尾根筋3城郭および至近2支城

となる。

このように見てくると、小谷城址の特質の2つには、この城が、一時に出来上がったものではなく、小谷山尾根筋上の遺構・金吾丸(O区-b)、六坊(A区-a)などを皮切りに、先端城郭遺構(出丸、O区-c)、東尾根筋城郭遺構(月所丸、G区)、さらには西尾根城郭群(N区)と順次増幅的に形成をみたことである。そして、特質はこのことと関連してであるが、このように縄張遺構の順次的形成・膨脹が、縄張構造(発掘調査の検出遺構からではなく)から類推し得たことは、これらの各遺構が、時期的時間的経過を経ながらも、遺構においては順次古い構造に対しての改造に改造を重ねるといった、新しい縄張構造の採用による改造といったことはなかったことをものがたっていた。なぜ、縄張構造を漸次、その時代に対応させて改造しなかつ

たのか、あるいは増築、改造を重ねていたとしても、縄張調査で容易に認め難い程度の改修になぜ止まったのかについて、そのことが生命や財産と直接関わることだけに、さらにはまた、この間に戦闘具・武器の大きな変化があっただけに疑問に思える。はたして浅井氏の性格に由来するものであったのか、あるいはそもそもいずれの城郭においても改造を重ねることの比較的少ないものであったのかどうかである。

第3の特質は、この城址における石垣遺構(石垣・城壁)の多用、もしくは小谷山尾根筋中心遺構に限って言えば、全郭が要所要所で石垣積みみの構えをとることである。県下の城郭の中でも石垣を用いること自体極めて特異な城普請である。ただ注目すべきことに、時期的に下降する小谷山尾根筋先端城郭遺構・出丸や東尾根筋城郭遺構・月所丸、あるいは大嶽山頂・西尾根筋城郭群・N区a～d(大嶽城や福寿丸など)、さらには至近支城には全く石垣遺構が認められない。つまり、鉄砲の伝来で石垣遺構が発達していくといった一般的傾向とは異にしており、信長との激戦を予想しての前線基地としても最も新しい縄張りでは、小谷城址で一般的であった石垣積みはもはや用いられておらないのである。あるいは石垣で構築するだけのゆとりがそこにはもはや存在しなかったともいえる。また、中心城郭群での土塁を指標とする改築の是非も、この地域の切岸の大きさと要所での石垣が、その後の鉄砲多用の戦闘に備え得る点がはからずもあったのではなかったかとの推測を持つ。つまり小谷城において微細な改修しかなされなかった背景には、すでにこの城郭主要部がこの時代を通して耐え得る機能を持つものとの認識にあったからではなかったかと思われるのである。別の表現でいえば、鉄砲普及の時代的趨勢の中でも安易な改修を不要とするほどの見事な城普請がすでに当初の築城契機時になされていたのではないかと評価である(これらの城郭構造の子細な評価は再度改めて考察したい)。以上が全般的な小谷城の特質であるが、次に浅井氏の居城となった、中心部の遺構から浅井氏の特質を探っていきたい。

## 2. 小谷山尾根筋主郭群の特質

### 縄張構造の特質

特質の1つは、遺構がこの尾根上の最高所である山王丸から始まり、金吾丸まで、間隙なく連続することである。同じ事は尾根筋左右の山腹遺構についても言える。その間直線距離にしておよそ800mに達する。いわば、梯郭式の典型的な平面と立面を採ることである。

梯郭式といえば戦国期山城の一般的形式で、何もとりたてて浅井氏の特質として云々する必要はなかろう。しかし、近江の守護大名である佐々木六角氏の居城である観音寺城は梯郭式をとらないし、佐々木京極氏の中心的山城である弥高百坊城もまた梯郭式ではない。ただ京極氏の最後の居城である上平寺城下に対しての背後山頂に築かれた詰めの城である上平寺山城は浅井氏のそれと比較にならないほど小規模なものであるが、梯郭式で築城されている。とはいえ、近江を代表する大名の山城が梯郭式をとらないことは注意すべきことである。つまりおよそその全容が、寺院とその構造を基礎として成り立つ山城とそうでない浅井氏の山城との比較はいやがうえにも浅井氏の特異さを際立たせることとなる。

なお、この小谷城中枢部の総面積はおよそ33,000㎡あり、京極氏の主要城郭の一つである上平寺山城の場合には12,000㎡であって、ものの数ではない。

特質の2つ目は、このような尾根筋上の中心主郭群の中央部・本丸背後で、中丸との間が大堀切で二分されていることである。小谷城址では、西尾根筋の3城郭の間、あるいは金吾丸と出丸の間など、さらにはすくなくとも大嶽山と小谷山との境となる鞍部において、堀切、もし

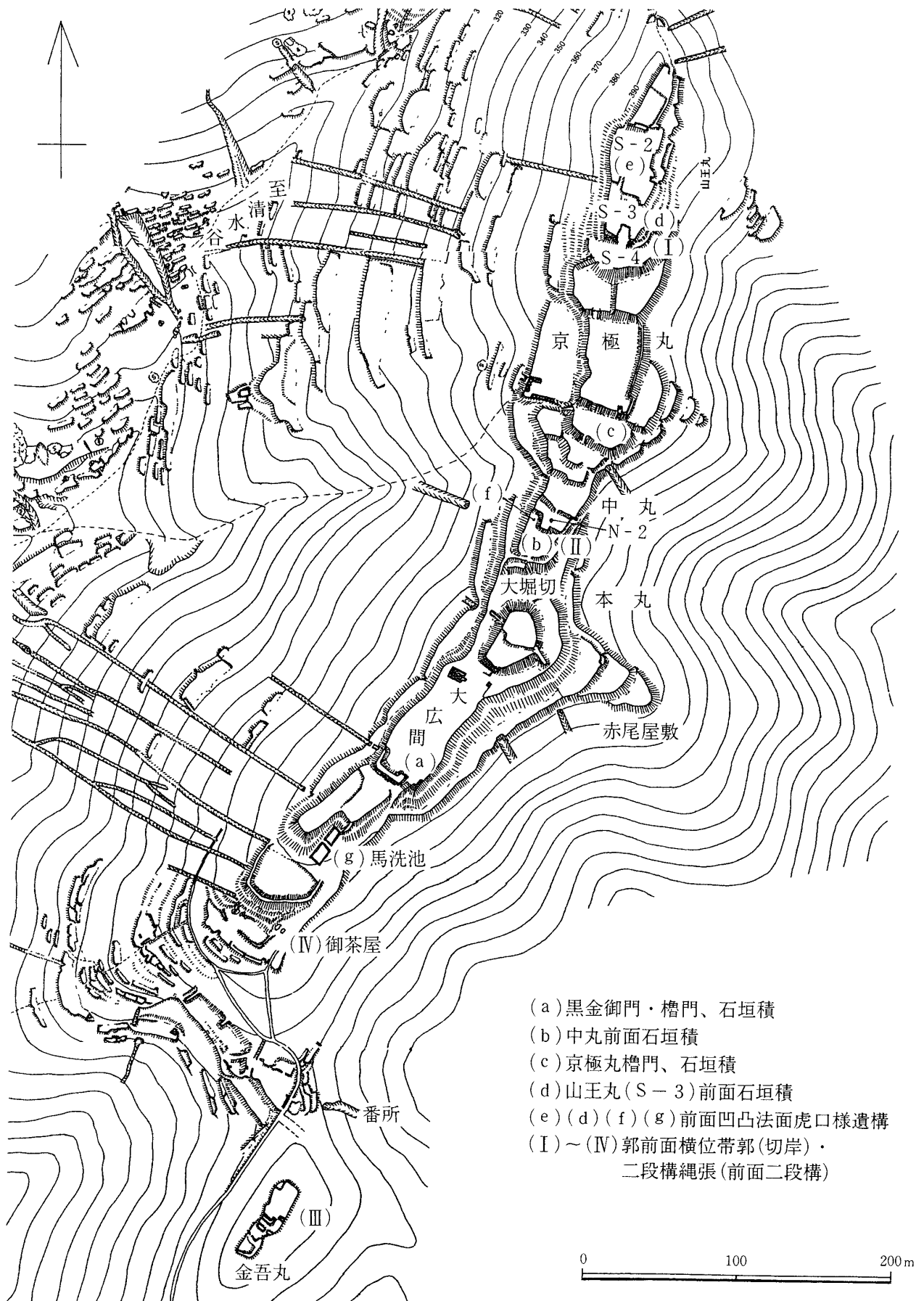


図1 小谷山尾根筋主郭群(依『滋賀県中世城郭分布調査7』)

くは堀切・豎堀が掘削されてもおかしくはないのにまったく認められないことである(この間に全く防御上の遺構がなく、また鞍部では東側の谷底へ向かって一条の豎堀が認められたのみである)。にもかかわらず、中央尾根筋でしかもその中心部に極めて大きな堀切を設定した意図は、両地域の連絡を困難にする意図が有り得ない以上、それは内部的なそして政治的、精神的、視覚的な目的による構造物であって、なんら戦闘上の効果を期待したものではないとみてよい。堀切から豎堀へと縄張りが展開しないこと、このため左右山腹の郭はここで二分されることはない。また、大堀切の底が通路としての機能を保持していることなどからも、この推定を一層助ける。にもかかわらずなぜ、この不要ともいえる大堀切が設けられたのか。そこには中心主郭群の二分性、二極構造の存在と深く関わるものと推測される。

なお、この大堀切はその下幅15.5m、長さ38.5m、深さ最高で9～10mを測るが、長さ、深さはともかく、その幅においては、県下ではもっとも大規模なものの一つではないか。しかも岩盤を砕いての作業である。京極氏の弥高百坊城の背後の堀切は山の傾斜地ということもあるが、その幅12mであったし、前面のそれは6mであった。いずれもこれまで確認された県下で最大クラスのものである。防御性のない大堀切の構築の意図はどこにあったのであろうか。もし強いて防御を云々するのならその防御を必要とする勢力は外敵ではなく内部に予想しなければならないであろう。

3つめの特質は、小谷山尾根筋中心部遺構群は他と異なり、面積の大小、普請の大小を問わなければ、全ての主要郭の要所要所に石垣構えが認められることである。

主要郭の前面を意識したものに、

(a)黒金御門つまり大広間の正面に土塁を回しつつ城壁としての石垣がみてとれる。その全幅40.5m(推定復元41.5m)、高さは向かって左の土塁部分で(既に旧状をとどめないほど破壊されているが)5.0m、右手の櫓門下で5.5mである。石積みは推定9～15段である。

なお、防御上、大広間・黒金御門の前面は、馬洗池の背後斜面となる。事実この箇所は、この尾根筋中心部では最も比高差が大きくかつ、険しい切岸となる(その比高差およそ13m)。そして、現山道(これは後世のもので、当時の登城路ではないと考える)に石垣基底部が残存し、脇にも石垣が認められることから、この山道が城の正面(大手)ではなく、別に登城路を予想しなければならない。ここに化粧の石垣が設けられなかったのもこのゆえである。さきの黒金御門が、正面であったことに変りはない。

(b)京極丸・中丸の前面となる大堀切の北壁は、岩盤を堀崩し、その岩が露出することから、一見強固な岩作りの視覚を与える。そしてこの上段が前面を石垣で構える中丸最下段、前面となる郭である。その全幅は28.5mで、高さは左右とも4.5mで、中央部は1.5mとなり、石積みは中央部現況で4～5段(推定で7段前後)である。

(c)京極丸の前面の石垣は、櫓門の向かって左手にのみその痕跡が看取される。右手にはなかったのであろうか。しかし、隣接して下段にあたる東郭の木戸口部分の左右には石垣があり、その前面は京極丸の前面と一つにつながっている。しかし、京極丸の虎口・櫓門の前面下段平坦部にはL字の目隠しの塀が予想され、これが障害となって当初から東・右手に石垣を回さなかったことも考えられる。なお、前面下段郭とはさほど段差が無いが、ここに石垣が設けられたのは、内部の郭の東にのみ、山城の城郭土塁らしからぬ比較的整然とした、背丈の高い土塁が築かれたことと関連した、この郭の荘厳化に関わる普請としてなされたものといえよう。前面幅42.3m、高さ4～4.5mである。また、さきの土塁は全長48m、高さ3.0m、下幅8m、上幅1.8mのものであった。

(d)山王丸、中心郭群の中で、前面比高差が、黒金御門の前面・馬洗池の背後には及ばないものの、大堀切にならぶ大規模なものである。しかもその前面が二段構えとなり、背後の構えは大規模な石垣である。その全幅は39.0mにおよび高さは8.5m、石材は現況観察可能地点で5段で積み上げている。この石垣は東側にも回るようである。ここでは長さ14m、高さ4mを測り、石材は12～13段に及んでいる。前面と比べると石材ははるかに小振りとなる。

正面石垣の中央部に木戸口かとされる箇所があり、平面凹部つまり左右突出の平面地形が認められる。ただ入口階段部とすれば、階段傾斜が極度となり疑問となる。後述する。

以上が石垣積み遺構の主要なものであるが、ここから帰納できることは、(1)尾根筋で落差の大きい、つまりそれだけ防御性の大きい地形に面した郭では、主要な館が築かれたものか、あるいは軍事上重要地点であったため、必然的に前面、もしくは左右山腹斜面にまでおよんで、石垣を構築していることが判明する。すなわち逆に、郭群のなかで、最も主要な郭についての識別を前面石垣が示唆してくれているといえる。

とくに、中心部郭群のなかで、前面に石段をもち、登りきった左右に櫓が設けられて門が開閉する、櫓門の構えをもつ大広間・黒金御門と京極丸虎口は、この小谷城郭群のなかで、館主の住まい、つまり政治にかかわった最も重要な人物の建物のあった箇所であることが判明する。それに準ずるものが中丸前面と山王丸前面の切岸・堀切と石垣および前面帯郭による二段構えの形式である。ちなみに、大広間の平面積は、2,400㎡におよび、京極丸はそれに次ぐ面積であった。石垣が、むやみに用いられたわけではなく、郭の重要性を考慮しつつ要所要所にのみ用いられたことがよみとれる。

小谷城の大きな特質の第4点目は、この点に関連して指摘しうる。

最新の城郭に石垣遺構の無いことを加味してこの石垣を評価するならば、その使用開始年代は、金吾丸築城以降で、土塁や横堀が完備する以前と推定しうるが、すでにここ金吾丸で前面防御の段差が削り残した岩壁からなりたっていることからみて、後の石垣構造に関連するのではないかと思われる。あるいは逆に、すでに主要な遺構に石垣があって、その知識が働いたとも見受けられる。この点は後述するように寺院構えの遺構との関連が判断の分れ目となろう。主要郭群の前面横位帯郭の前面段差が削り残しの直壁岩盤となる典型が、本丸背後の中丸の前面をなす大堀切の内壁として認められることである。また、山王丸の前面をなし最前線の帯郭となるS-3(図1)の郭では、その前面の落差は7.5～5.5m、全幅57mと大きくかつ急峻である。全落差は16mにも及ぶ。一部岩盤の露出を見る。しかし、石垣はない。つまり京極丸とともに包括され同じ地域にまとめ得る大堀切北壁(a)、山王丸の地域に包括される帯郭前面の大きな切岸(b)、そして、金吾丸前面帯郭前落差の岩壁(c)の三遺構は、今だ石垣が使用されておらない時期のものであった可能性もあるが、それ以上に岩盤・岩壁を意識しての直壁切岸の形態をとったことに石垣積みの効果を狙ったものと推定できないであろうか。

そして、石積みの意図や知識が無かった訳ではなく、岩盤の効果によって故意に石垣を築くことはなかったのではないか、といった観点でとらえ得る。ここではこの点を「郭前面横位帯郭・二段構縄張構造」として評価したい。

なるとなれば、その構造が尾根筋に平行する通常の帯郭ではなく、尾根筋に直交する帯郭といった特異な構造として設けられ、しかも、その箇所は、主要郭群の前面となることから、この尾根筋上の多数の郭群を幾つかのブロックに分かつ指標としうる。さきのa～cに、(d)大広間・黒金御門を中心とする大規模郭群の前面横位帯郭となる「御茶屋郭」・帯郭を加えると、都合4ブロックとなる。つまり小谷山主郭群が金吾丸、大広間、京極丸、山王丸の4主郭から

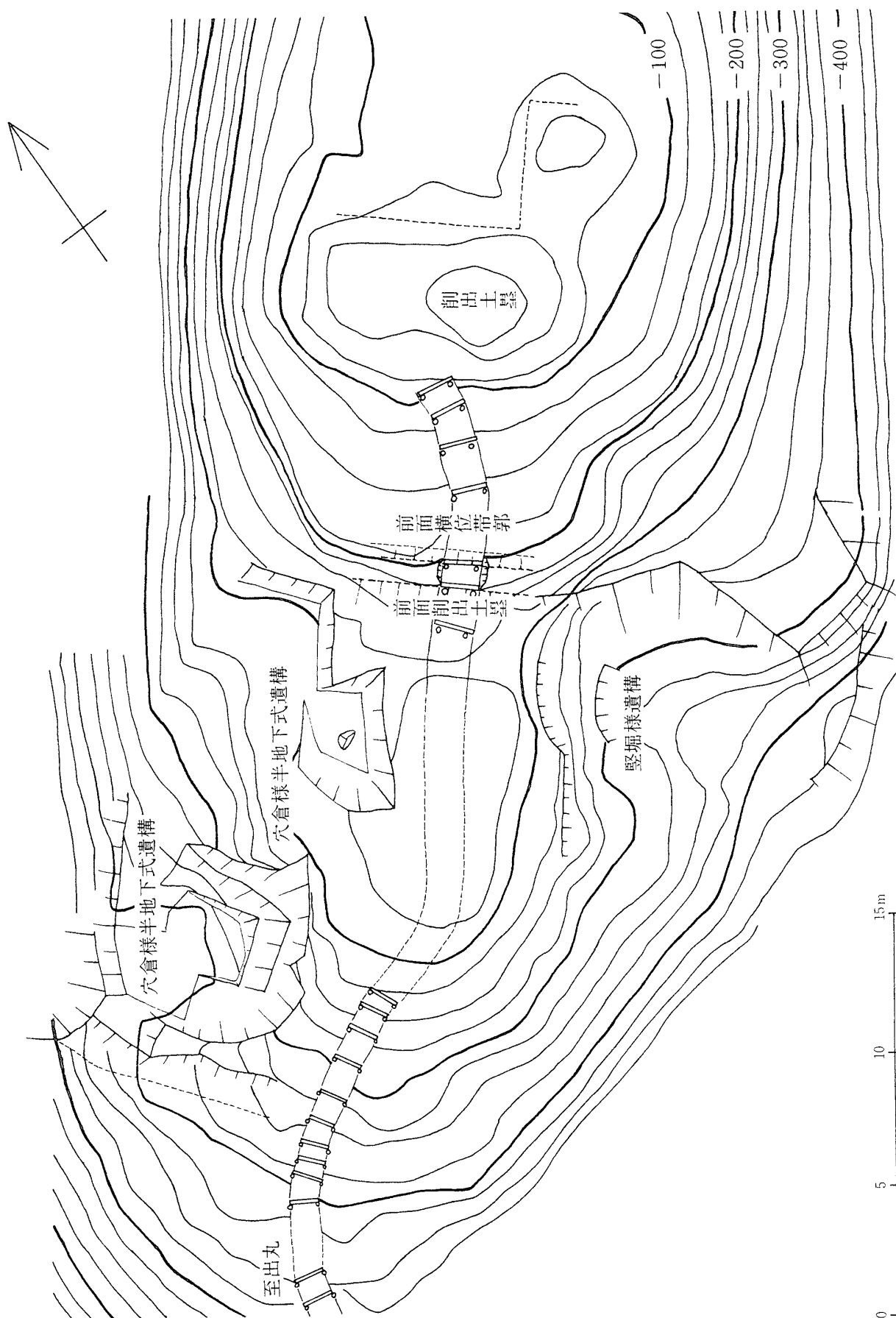


図2 金吾丸跡測量図

なることがこのきわめて特異な縄張構造からも明確になる。

なお、このような「前面横位帯郭、切岸二段構構造」の縄張り上の特質を持つ浅井氏の城郭築城術はこの時期独自のものでかつ、かなり水準の高いものであったことが読み取れる。

なおまた、この前面構えの類似性と土塁の欠如から判断すれば、中丸や山王丸は、部分的に改修の造作がなされたとしても、基本的には金吾丸と同期に並存した部分のあることを示すものと解したい。

### 3. 縄張構造の特質

縄張構造の特質の一つに先に指摘した「前面二段構構造の特質」といったものがあるが、さらに第2点目として、中心部主郭に認められた虎口構造について指摘しなければならない。ここでは最初に、櫓門を構えた虎口の存在に注意をしたい。

黒金御門に相当する箇所での虎口は、その階段幅がおおよそ5.5mもあり、左右に石垣の付くこの石段は7段(推定復元8段)を数え、その全長は5.2m(推定全長6.2m)に及ぶ。

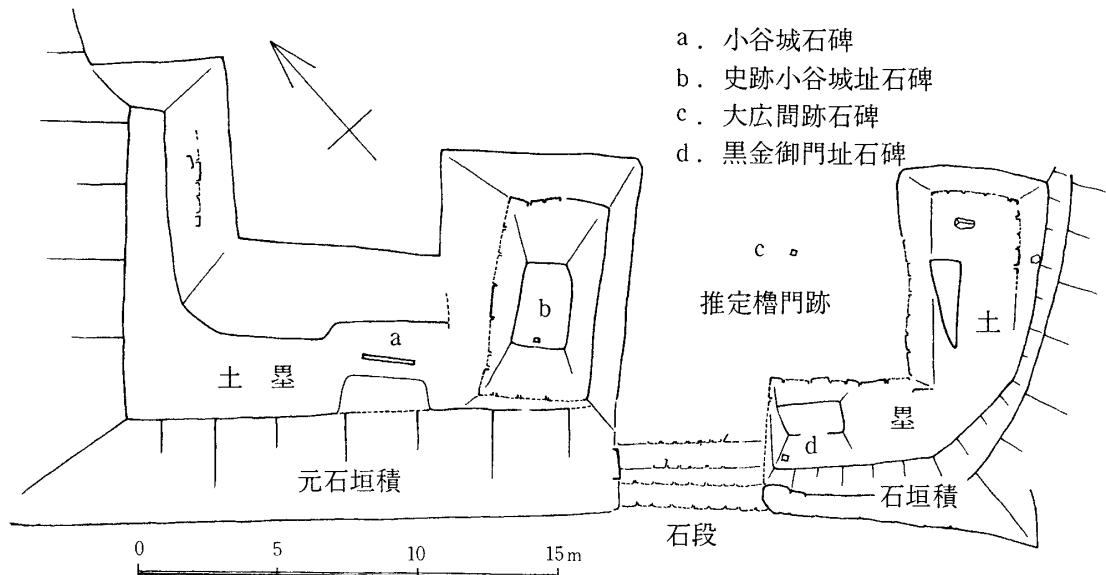


図3 黒金門跡測量図

中心郭である大広間の前面土塁がこの階段を挟むようにしてあり、この土塁先端部は左右ともに覆われるようにして二つの櫓が築かれている。その櫓間の大手階段を門が開閉する仕組みとなっていた。櫓門の存在である。なお、規模こそ異なるが、まったく同様の櫓門をとる門構虎口は京極丸でも認められる。その階段幅は3.3mで、12段(推定復元14段)、全長9.5(門まで推定5.5m)である。つまり、この広大な小谷山城のなかで、この二箇所だけに「櫓門構虎口」が存在することは浅井氏の歴史にとって重要な意味があったにちがいない。逆に言えば、この城址のなかに、櫓門構えの主郭が二箇所並存するには、それなりの経緯があったのではないかと、いった疑問がおこるのである。そうみれば、この二箇所の主郭の規模は、前者が2,400㎡で、後者が1,250㎡とその差は大きい、ほかに比較すべきものもなく、群中で傑出した規模をどちらも持つことに最も注意が払われる必要がある。

三つ目は、尾根筋の郭群の中に、櫓門構虎口と並んで注目される平面凹部の形状を呈する虎口様箇所が認められることである。最も著しいものに、山王丸最前面の石垣遺構中のそれがあ

るが、その続き背後の郭の前面も規模こそ異なるが類似遺構が認められる。また類似するものが京極丸前面の郭にも認められる。ある意味では桜の馬場の前面、馬洗池の背後の凹凸も巨大すぎるものの酷似するといえるかもしれない。この特異な縄張構造は、小谷山尾根筋の中心部に限定されるようである。

当初は、郭への入口部をなす平面凹部の木戸口かと推定したが、平面凹部箇所での底面が傾斜をもたず、かりに傾斜がなかったとしても、平面凹部の奥、つまり上段郭に面する箇所であってしかるべき石段が明確には認められず、かりに石段があったとしてもその落差は急峻でその石材も石段には不向きな小振りのものが観察される。そこは郭を結ぶといった入口には不向きな要素ばかりが目につく。つまりこの部分は木戸口ではなく、ましてや虎口でもなく、用途不明の平面凹凸部とみなし、今後検討を加えるべきと見る。やや詳しくその形状を紹介してみると、(a)もっとも門形状をなす大石垣の郭(S-3)では、前面石垣が崩壊し、一部埋没箇所もあって不明瞭なことにもよるが、その上幅7.0m、奥行き8.5m、深さ2.0mを測る大規模な窪みである。左右法面には、小規模な石材による石垣が認められ、正面の法面にも上段で石材が認められるが、その傾斜からは階段を予想することは困難なほどである。(b)山王丸前面の郭(S-2)では、その前面法面が食い違いの凹凸をなし、凹部が虎口かと一見される。

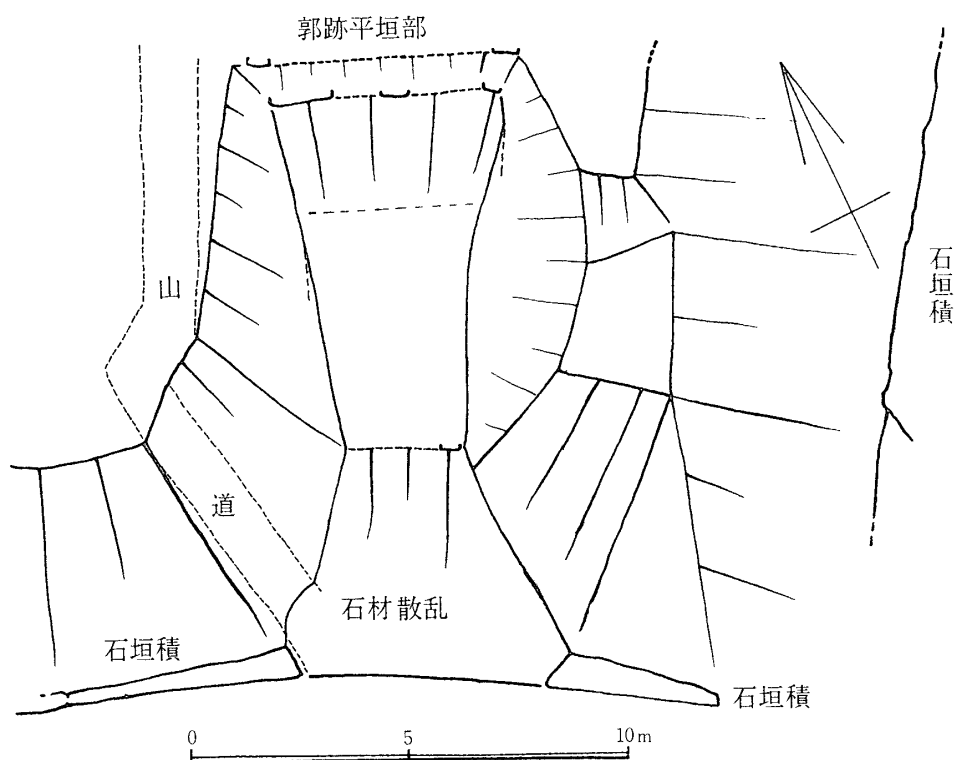


図4 山王丸S-3郭凹凸部測量図

その規模は上幅およそ6.0m、奥行き10.5mと6.0mで、深さ2.0mである。左右の法面は急峻で、奥はやや緩斜面かと思われるが、やはり小規模な石材による石積みが一部に認められ、ここから上部の郭へ取り付いたとは考えがたい。では中丸のそれはどうであろうか。

(c)中丸では、そのような郭前面の凹凸法面は、大堀切の北側二つ目(N-2)の郭で知れる。し

かし、先の山王丸のような凹部の著しいものではない。

(d)また、黒金御門下の桜馬場の前面法面についても、やはり山王丸のそれとはかなり趣を異にする。しかし、凹部に馬洗池が食い込むように築かれ、法面上部はともかくその裾回りでは著しい凹部を形成し、また対応して凸部の形成をみるため裾部平面形態は凹凸部のそれである。その規模において桜馬場のものが到底そこに虎口を想定するわけにはいかないほど大きいため、彼我の対比が不可能であるがそこには酷似とまではいかないものの類似するところがあるのではないか。

以上の「凹凸部法面」をまとめると、同様の遺構は、大嶽山頂・西尾根遺構群の3城郭や同東尾根遺構・月所丸、あるいは中央尾根部の先端出丸や金吾丸では観察できない。つまり土塁や横堀のあるような時期の遺構群では認められないのである。年代の新しい遺構群では用いられなかった築城法であろうか。いずれにせよ埋土が著しく正面の斜面が正しく観察不能であるから、馬洗池を除いて、現況でこれらがすべて虎口・木戸口ではないとの断定は出来ないが、正面に遺残する石材から、その全幅を階段上り口とするには、先にも触れたように急峻すぎる。ゆえに正面のたとえば右端一部を緩傾斜で木戸口とする可能性も捨て切れない。しかし、この考えは別の箇所に本来の木戸口を予想させるものである。

以上のように、ここ小谷城では、先の「前面横位帯郭、切岸二段構構造」や「石垣作りの縄張り構造」などととも、他の城郭では容易に見られない独特の個性のある縄張り構造が認められたが、それをここでは「前面凹凸法面虎口様遺構」と呼称しておきたい。

なお、この凹凸法面の凹部を木戸口・虎口とみなしがたい他の根拠は、平安・鎌倉に遡るとみられる山岳寺院のなかにほぼ同様な遺構が見受けられることにある。測量調査によってその子細の判明する志賀町北比良ダンダ坊遺跡(図5参照)について、その様子を探っておきたい。ダンダ(壇多)坊遺跡は、比良山麓でも北比良字極座(タンタ)山の海拔420mを前後する山腹に築かれた山岳寺院である。

比良川がY字となって支流をあつめる出合橋の北側に広がる広大な坊跡群からなるが、参道を登り詰めた最も高いところのかつ大きな平坦部は本坊跡とみなされる。山腹を削平して幅70m



図5 志賀町ダンダ坊遺跡測量図

奥行き23.5mの平坦地を設けたもので、比高3mの緩傾斜を十数段の石段を上ると山門跡の礎石があり、その正面には低い基壇跡が認められ、東側にはやはり3棟の建物を推定させる基壇の高まりと礎石が認められる。

この寺院の年代は、山門から向かって左手にある石組からなる水槽の背後、先の基壇跡の西側にある一辺6m四方のわずかな基壇状高まりの中心部の乱石中に五輪塔の笠石が埋没しており、その形式が鎌倉時代に遡るものと認められることである。この寺院の創建は目下出土土器もなく決め手を欠くが、この本堂跡のさらに背後の平坦地にかつて墓塔が数基並んでいた痕跡とその基壇跡が認められることから、下限は室町時代に求められるし、上限はかつて出合小屋のすぐ背後の平坦地・坊跡から出土した奈良・平安時代にさかのぼる獣面脚をもつ焼物の香炉から、おおよその推定を下すことができる。

問題は、この石段左右の高さ3m足らずの石垣が平坦地の前面輪郭を形作るのであるが、石段・山門跡から東へ18m真っ直ぐ続いたあと、幅3.5m、長さ14.5mの規模でこの石垣が前面に張り出し部・凸部を形成するのである。そしてさらに、東側ではこの張り出しに対応するように奥行き4.9m、幅2.34m、高さ2.78mの凹部・へっこみ部が認められた。その様子は正しく先の小谷城で述べた平面凹部の虎口様遺構と同一のものであった。このダング坊遺跡においても、この凹部の機能が明確ではないとはいえ、小谷城の凹部遺構は、石垣遺構とともに寺院構えの構造から学ばれたものではなかったかとの推測が可能となる。

つまり、佐々木六角氏の観音寺城や佐々木京極氏の弥高百坊城があまりにも明確な寺院遺構を基本に城郭を構えたことから、守護大名と寺院の利用・踏襲を強調してきたが、浅井氏もまた小谷山の山岳寺院を利用し、かつその構えを築城に採用・応用しながら小谷城を築き上げていったことの可能性を推測させた。どの部分が寺院の利用によるものであり、どの部分が城としての築造かなどは今後の課題であるが、これまでも一部に指摘されてきた小谷城と寺院の関係が、さきの凹凸部の指摘によってより一層問題点の具体化が図られたといえる。

### 結びにかえて

浅井氏は、文献上では朝倉氏の圧倒的な支援によって保護され、さらにはその配下にあった証左として、その築城までも常に任してきたとみなされてきた。しかし、小谷城の中心郭群を検討の結果そのような朝倉氏の関与は疑問視され、そのみか浅井氏の独創的な城郭築城法に目を見張るものがあり、寺院構えや石垣積みの採用などもその積極的な姿勢の現れではないかとみたい。これまでの予想に反して、むしろ越前とことなった縄張りが展開したのではないかと推定し得るのである。その独創性の基盤は江北の山域や山岳寺院にあったとみたい。

言い尽くせなかった点や残された課題は多いが紙数も尽きたので以後の機会に論点を整理しつつ問題を説き明かしていきたい。